

第13回 Silser Hesse-Tage に参加して

小澤幸夫

2012年6月13日から17日までシルスマリアのHotel Waldhausを会場に第13回 Silser Hesse-Tageが開催された。

シルスマリアはニーチェが『ツァラトストラ』の永劫回帰の着想を得た土地としても知られ、ニーチェが滞在した家も記念館として残っている。

Silser Hesse-Tage はヘッセ全集ならびに書簡集の編集者であるフォルカー・ミヒェルス (Volker Michels) 氏が、ベルンの国立図書館にあるスイス文学資料館 (Schweizerisches Literaturarchiv) の初代館長であった Thomas Feitknecht氏とともに始めたものである。今回は13回目にあたり、テーマは“Musik, die Seele aller Künste”「音楽、あらゆる芸術の魂」であった。

ミヒェルス氏と出会ったのは、ちょうど30年前の秋、当時留学していたマールブルクからフランクフルトの書籍見本市に行った時のことである。ヘッセの作品を出版しているズーアカンプ社のコーナーで本を見ていたところ、彼の方から声をかけてくださった。

まだ大学院生でドイツへは来たばかり。右も左も分からなかった筆者は、高名なミヒェルス氏とは知らず只の書店員だと勘違いし、手元にあった本を見せ、これを買いたいのだがと訊ねた。氏は笑いながら、これは売り物ではないので、本屋で買ってくれと言いながら、その場にいたヘッセの研究者 Gisela Kleine氏を紹介してくださった。Kleine氏は、出版されたばかりのヘッセと3番目の奥さん Ninonに関するご著書“Ninon und Hermann Hesse. Leben als Dialog”にその場で署名を入れ、プレゼントしてくださった。

その後ミヒェルス氏の車で自宅まで連れて行っていただき、奥様や御嬢さんを紹介していただいた。天井まで届きそうな資料の山に驚いたのを今でも覚えている。奥様も大変気さくな方で、寝室まで見せてくださったが、そこには日本で買った

てきたという浴衣が飾ってあった。

帰り際に様々な本と一緒に、ヘッセの政治に関する評論や随想をミヒェルス氏が編集した『良心の政治』（“Politik des Gewissens”）という2巻の書物を頂戴し、「ぜひこの本を訳して出版してほしい」と依頼された。この時の約束を忘れたことはないのだが、どうしたらよいのか分からず、そのまま時が過ぎ、やがて日本語版のヘッセ全集が出ることとなった。結局政治に関する文章は、もっと適任の方が担当することになり、筆者は『デーミアン』と『1917年～1919年の夢日記』を担当した。ミヒェルス氏はこれをとても喜んでくださり、不明な箇所について質問するといつでも丁寧に答えてくださった。これは何も翻訳に限ったことではなく、論文を執筆する際も同様であった。

奥様のUrsula Michels-Wenz氏は、バーナード・ショーの研究家、翻訳家として知られ、ピアノや歌も堪能であった。アメリカ留学中に、当時別の出版社に勤務していたミヒェルス氏と手紙の交換を通じて知り合ったとのことである。

Freedmannによる浩瀚なヘッセの評伝を米語から訳したのはウルズラさんとフォルカーさんの共同作業である。米語からの翻訳はウルズラさんが担当し、原著の誤りをフォルカーさんが訂正した。そのような訳で、この本に関しては原著よりドイツ語版の方が信頼できると言われている。

ウルズラさんとはその後もヘッセの国際会議に出席する度にお目にかかったが、いつもフォルカーさんに影のように寄り添っていた。才能は有り余るほどありながら決してそれをひけらかすことのなかった方だった。

このウルズラさんが、今年の4月3日ベルンのヘッセ絵画展の最中に突然亡くなるという不幸に襲われた。フォルカーさんは親しい人に会うごとにこの話をし、「彼女の才能を十分に伸ばすことができなかったのは自分の責任だ」とおっしゃっていたが、気落ちのほどはいかばかりであろう。

最後にウルズラさんにお目にかかったのは、10年ほど前Gaienhofenで開かれたHesse-Tageの時だった。

ヘッセ畢生の大作『ガラス玉遊戯』は難解な作品であるが、この作品について、必ずしも冒頭からではなく、主人公ヨーゼフ・クネヒトの伝記から読んで、その後で序章の部分を読んでもいいのではないかという質問をフォルカーさんにした。

氏はしばらく考えていたが、そこにやって来た他の研究者たちとの挨拶に追われ、答えを聞けなくなってしまった。その後、他の方々と夫妻を囲んで一緒に食事をした時、「あなた、まだ小澤さんの質問に答えていないわよ」とさりげなくおっしゃってくださったのはウルズラさんだった。

ワインを片手に煙草をくゆらす姿は女傑という風貌であったが、このように繊細な心配りののできる優しい方であった。

いつもお世話になっているので、今回はフォルカーさんだけでなく、ウルズラさんにもささやかなお土産を持って行ったのだが、ついに渡す機会に恵まれなかった。

会議では発表の合間に、ウルズラさんが作った詩が朗読され、皆で哀悼の意を示した。心よりご冥福をお祈り申し上げる。



(Volker Michels氏)

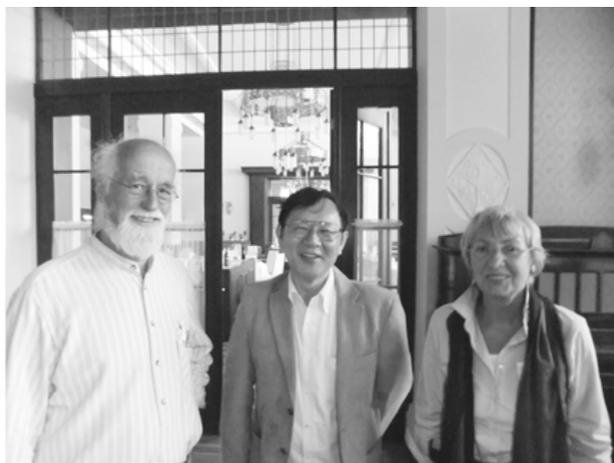
悲しいことばかりでなく、嬉しいことも多かった。以前やはりGaienhofenで開かれたHesse-Tageで知り合いになったヘッセのお孫さんのChristinaさんと再会できた。学会の翌年、ベルン郊外のBremgartenのご自宅にお邪魔した時はお元気だったご主人のFritzさんが数年前に亡くなり、しばらく生きる気力を失っていたようだったので心配していたが、以前と変わりなくお元気で、若返ったような印象さえ受けた。



(Christinaさん)

今回はChristinaさんだけでなく、SimonさんSilverさんというヘッセの他の2人のお孫さんにもお目にかかれた。ChristinaさんとSimonさんはヘッセの長男Bruno氏のお子さんで、お父さんと同じくヘッセの最初の夫人Maria（愛称Mia）に風貌が似ているという印象である。ChristinaさんもSimonさんも大変優しく穏やかな方で、これもBrunoさんの血をひいているせいかもしれない。Bruno氏は画家であったが、その絵は大変端正なものであり、水彩画のような優しい感じがした。

Simonさんとはたまたま会場に行く途中で一緒になり話を聞く機会を得た。はにかみ屋で人見知りをするタイプのものであったが、こちらから声をかけると気さくに話を聞かせてくれた。筆者が前の晩にChristinaさんと親しそうに話をしていたので誰かと思っていたそうである。伴侶の女性は明るくはきはきした感じでとても良い組み合わせのように思えた。彼女とはGaienhofenで知り合い、最初の瞬間に「火花が散ったんだ」とユーモアを交えながら話してくださった。



(Simonさん、伴侶の女性と筆者)

Silverさんは次男のHeiner氏の息子さんで、風貌もお父さんを思い出させる。Heinerさんに会った時の様子は以前にも書いたが、当時未公開だったヘッセの原稿のコピーの許可や、作品解釈などめぐっていろいろとお世話になった。

お父さんのHeinerさんはヘッセ似で、そのせいかSilverさんもお祖父さん似であるが、髭を蓄えた様子はちょっとニーチェを彷彿とさせるものがあった。



(SilverさんとIlma Rakusa氏)

高名な研究者で作家でもある Adolf Muschg 教授とも親しく言葉を交わす機会を得た。さらに修論で論文を引用させていただいたアメリカの研究者でオルガンニストでもある C. Immo Schneider 教授、イギリスの音楽学者で Othmar Schoeck の研究家である Chris Walton 教授、ヘッセとリルケの研究者であるドイツの Johannes Heiner 博士などの話を伺うことができ、大変実り多い日々であった。

個人的な思い出が先行してしまっただが、会議の様子について少し書いておこう。最初に “Musik der Töne, Musik der Worte-Hermann Hesse und die Magie des Klanges” 「音の音楽、言葉の音楽。ヘルマン・ヘッセと響きの魔力」と題する作家の Ilma Rakusa 氏の講演が行われた。

氏は1946年にスロヴェニア人の父とハンガリー人の母の娘としてスロヴァキアに生まれ、チューリヒ、パリ、セント・ペテルブルクでスラブ文学並びに仏文学を学んだ。現在は作家、翻訳家、ジャーナリストとしてチューリヒを拠点に活躍している。1998年には “Leipziger Buchpreis zur Europäischen Verständigung” (ヨーロッパ理解に貢献した人に贈るライプチヒ文学賞) を、2003年にはアーダルベルト・シャームissoー賞を、2009年にはイタリアのトリエステで過ごした幸せな

幼年時代の思い出を描いた“Mehr Meer”（もっと海を）でスイス文学賞を受賞した。

彼女の講演は、初期のヘッセの抒情詩に見られる音楽性を、脚韻の精緻な分析のみならず、頭韻や行中に用いられている語の韻からも明らかにしたものであった。それとの比較でオーストリアの現代詩人で音楽家でもあるMichael Donhauserの実験詩（experimentelle Lyrik）が例に挙げられたが、これは散文を詩のように行を分けて書いたもので、一般に詩のメルクマルであるとされる脚韻さえもないものであった。

次の講演はイギリス人の音楽学者Chris Walton教授の“Hermann Hesse und Othmar Schoeck”「ヘルマン・ヘッセとオトマル・シェック」で、今回の発表の中で一番興味深いものであった。

シェック（1886～1957）はフーゲー・ヴォルフ亡き後のドイツ・リートの大作家の一人として知られ、400曲近い歌曲を作曲している。彼がテキストに選んだのは、ゲーテ、メーリケ、レーナウ、アイヒェンドルフ、C.F.マイアー、ゴットフリート・ケラーらのドイツ文学史を彩る錚々たる詩人ばかりであり、同時代人の詩人のテキストを用いることは稀であった。アルビン・ツォリンガーやジェイムズ・ジョイスなどの高名な作家も自作の詩をシェックに送ったが、作曲されることはなかった。

そんな中で唯一の例外がヘッセであり、20曲以上もの作品を残している。ヘッセとシェックは一緒にイタリア旅行をするほど個人的に仲が良かったが、お互いに芸術家としても認め合っていた。二人はちょうどホフマンスタールとR.シュトラウスのように、オペラを創作することも考え、ヘッセはそのためにテキストも執筆したが、実現することはなかった。

シェックは50年もの長きにわたりヘッセの詩に作曲したが、後年なぜヘッセの詩に曲をつけたかと問われると「ヘッセは青春時代の思い出だよ」と答えたそうである。事実、シェックが若い頃失恋した際ヘッセの詩に心を慰められたことが

ある。また第二次大戦の終わり頃、作曲ができなくなった時に手紙で創作意欲を取り戻させたのもヘッセであった。

Walton教授によれば、ヘッセの音楽観はシェックの影響を強く受けているということであった。講演の後、教授に「ヘッセはなぜかブラームスを評価していないが、これはシェックの影響だろうか」と質問してみた。教授は「ヘッセの作品を詳しく読んでいないのでわからないが」と前置きしてから、「シェックはブラームスを評価していなかった」と答えてくれた。ちなみにブルックナーに対してはシェックは高い評価を与えていたようである。ヘッセの音楽観とシェックの影響については、まだまだいろいろ考察する余地があるように思われた。

2日目はC. Immo Schneider教授の“Wo Ratio und Magie eins werden:Liegt da das Geheimnis der Musik?”「理性と魔法が一つになるところ。そこに音楽の秘密が？」という講演で始まった。

『ガラス玉遊戯』（“Glasperlenspiel”）には主人公クネヒトを導く音楽名人が登場するが、氏によればこれはユングのいう「元型」（Archetype）の一つ「老賢人」であり、オルガンはヘッセにとって芸術と科学の統一の象徴ということであった。

講演の後半はヘッセの詩「オルガン演奏」（“Orgelspiel”）（1937）の朗読と、そこからインスピレーションを得た氏の即興演奏（20分ほど）に充てられた。

前述のように教授はオルガニストでもあり、以前ヘッセの生誕地カルプで行われた国際会議では教会で生演奏を聴く機会があった。ゴシック式の教会の中で響くパイプオルガンの深々とした響きは今でも忘れられないものである。残念ながら今回はホテルなのでそのような設備はなく、代わりにワシントンの教会がスクリーンに映し出され、そこで演奏された即興演奏を録音で聴くこととなった。オルガンの多彩な音色を活かした演奏は、まさに色とりどりのガラス玉を連想されるのにふさわしいものであった。



(C. Immo Schneider教授)

午後はニーチェ記念館で行われているヘッセ展をPeter André Bloch博士の案内で見学する機会があった。記念館自体が小さいので展示品は多くなかったが、氏の解説は列車内でのヘッセとの偶然の出会いから始まり、ニーチェの作曲した曲の披露まで及ぶ興味深いものであった。

夕方にはMichels氏の講演、“Zauberformeln mit Heilkraft - Über Hesses Lyrik und sein Verhältnis zu deren Vertonungen.”「治癒力を持つ魔法の形—ヘッセの抒情詩とそれにつけられた曲についてのヘッセの関係について」が行われた。氏はまずヘッセの抒情詩それ自体が持つ音楽性について述べた。ヘッセ自身は詩それ自体が音楽を内包しているので、それに曲をつける必要性は感じていなかったようであるが、前述のようにシックの作品に関しては常に肯定的であった。

リヒャルト・シュトラウスが最晩年に作曲した管弦楽伴奏歌曲集である『最後の4つの歌』(“Vier letzte Lieder”)は4曲のうち3曲までがヘッセの詩をテキストにして使っている(残りの1曲はアイヒェンドルフ)。これはヘッセの詩に作曲したものとしては最も有名な作品で、また最も美しいものと言われている。

ところがヘッセはまったくこれを評価していない。おそらくシュトラウスが第

2次大戦中帝国音楽院総裁の地位にあったことと関連しているのだと思われる。以前ヘッセとブラームスの関係について拙論を執筆中、この件についてミヒェルス氏に訊ねたことがあるが、氏もまったく同意見で、今回の講演でもこのことについて触れていた。ヘッセの音楽観は時にはかなり主観的なもので、必ずしも純粹に音楽的なものではないというのが氏の主張である。

晩には作曲家 Kurt Adolph Böhm がヘッセの詩につけた作品を Florian Preyの歌と氏自身の伴奏で披露した。軽い感じのサロン風の曲が多かったが、なかにはシューベルトのバラードを思わせるものもあり、興味深かった。なおバリトンの Florian Prey は日本でもおなじみの Hermann Prey の子息である。

翌日の午前中はドイツやスウェーデンから来た3人の若い研究者の発表にあてられた。後進を育成しようという Michels 氏の配慮で、最初の頃からこのような企画がなされているようである。

午後には Thomas Feitknecht 氏の “Wie der Steppenwolf Radio und Grammophon schätzen lernte.” 「荒野の狼はいかにラジオと蓄音機をめぐることを学んだか」という講演が行われた。

ヘッセは最初のうちは「荒野の狼」同様新しい物を避けていたが、1931年モンタニョーラに移り住み、コンサートに通うのが難しくなってからはラジオで音楽を聴くようになった。それはほとんど宗教的な行為ともいえるもので、Feitknecht 氏が引用した家族の証言によれば、「ハイドンの交響曲を聞く時は一緒にじっと目を閉じ、耳を傾け、手で拍子をとっていた。時には儀式を行う司祭のように手を動かしていた」そうである。

ヘッセが亡くなる前日に Ninon 夫人とラジオで聴いたのがモーツァルトのピアノソナタ7番ハ長調 K. 309であったのは良く知られているが、氏によれば演奏は直前にモスクワで開催されたチャイコフスキーコンクールで優勝した Jean-Bernard Pommier だったということである。

氏はさらにNinon夫人の戯れ詩を紹介した。

“Am Abend , wenn es acht geschlagen,
Wird Bach und Mozart übertragen.”

(夜になり、時計の鐘が8時を告げると

バッハとモーツァルトの放送が始まる。)

ヘッセ夫妻の日常が窺える。

なおFeitknecht氏は今回限りでこの企画の共同責任者の地位を降りることになった。今までの功績を称え花束が贈呈され、惜しめない拍手が送られた。



(Thomas Feitknecht氏 [右側])

この夜はベートーベンのピアノソナタの全曲演奏会が行われた。12人のピアニストが夜9時から翌朝9時まで夜通しで行うもので、一般に知られている32曲以外にも青年時代の習作3曲、さらに4手のための作品1曲を含む36曲という文字通りの全曲演奏であった。

翌朝ムシュク教授の講演があったので聴くのは諦めたが、最後には日本人のピ

アニストが登場し大変見事な演奏をしたそうである。

最終日はムシュク教授の“ ,Das Glasperlenspiel ‘ von Hermann Hesse und ,Doktor Faustus ‘ von Thomas Mann” と題する講演があった。

氏はまず折から開催されていたサッカーのヨーロッパ選手権に触れ、音楽もサッカーも限られた時間の中で行われるものだと始めた。音楽が時間芸術であることは改めて言うまでもないが、この比喩に聴衆は引き込まれたようである（なぜかこちらの男性は職業や学歴、教養の深さに関係なくサッカーの話になると夢中になる人が多い）。

トーマス・マン『魔の山』は、二重の意味で“Zeitroman”だとよく言われる。ドイツ語の“Zeit”には「時間」とともに「時代」という意味があるが、この二つが作品の大きなテーマである。

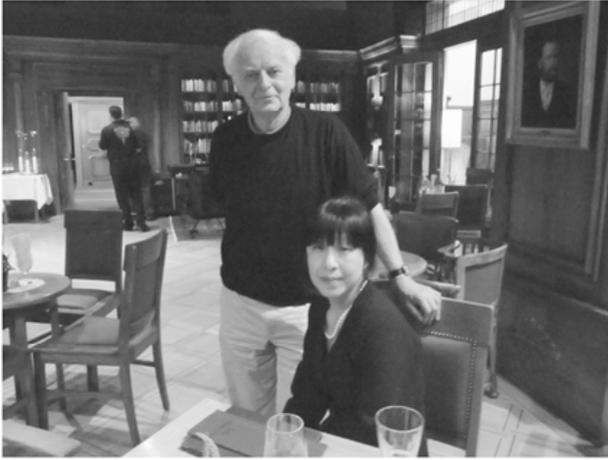
マンの『ファウスト博士』は、作曲家アドリアン＝レーバキリユーンを主人公として、彼の没落の悲劇を通じて19世紀以来ドイツのたどった運命を第二次大戦を背景として描き、ドイツ人の抽象性や観念的陶醉にひそむナチズムへの傾斜を暴いた作品である。

一方ヘッセの『ガラス玉遊戯』にも音楽名人が登場するが、舞台のカスターニエンは未来の理想国家－Adrian Hsiaによれば古代中国－であり、時代との対決は見られない。

さらに氏はシラーの美学論“Über naive und sentimentalische Dichtung（『素朴文学と情感文学について』）にも言及し、シラーとゲーテとの関係をヘッセとマンとの関係になぞらえた。

氏の講演は他の発表者と異なり、原稿をまったく用意していないもので、思いつくままに自由に語るというものであったが、長年の研究者としての蓄積がある

ことは言うまでもない。



(Adolf Muschg教授夫妻)

この講演を最後に4日間のヘッセ浸けの日々は幕を下ろしたが、Sils-MariaとWaldhausのgenius lociに囲まれた夢のような日々であった。